

4. 学校研究課題

1. 研究主題

「興味・関心を生かし、主体的に学び続ける教師を育む研究」

～個人探究とグループ研究を通して、

教育目標、目指す子ども像への多様なアプローチを開拓する～

本研究では、教師が自身の興味や関心に基づいて主体的に学び、実践の中で試行錯誤を重ねることを重視します。そのプロセスを通じて、教師自身の力量が高まり、その成果を子どもたちに還元できるような教育環境を作り出すことを目指します。

2. 主題設定の理由

1) 国の教育方針に基づく背景

国は、教育の根本に「生きる力」の育成を掲げ、特に「主体的・対話的で深い学び」を推進しています。この方針のもと、子どもたちが自ら課題を発見し、解決に向けて主体的に学び続ける力を育むことが求められています。教師がその支援を行うためには、まず教師自身が「学び手」として成長し続けることが重要です。本研究は、教師が自らの興味・関心に基づき、試行錯誤を重ねて学び続ける姿勢を育むことに焦点を当てています。

2) 教育目標と目指す子ども像との関連

本校の教育目標である「やさしく、かしこく、たくましく 未来を創造的に生きる力の育成」には、子どもたちが未来に対応する力を育むことが求められています。この目標を実現するためには、教師自身が「やさしく」「かしこく」「たくましく」学び続ける経験をすることが不可欠です。教師が自ら進んで学び、試行錯誤し続けることが、子どもたちにとって最良の学びのモデルとなり、子どもたちに自らの学びの経験を伝え、子どもたちに模倣させることができます。また、目指す子ども像「互いに認め合い、自分も他人も大切にする子」「他を思いやり、折り合いがつけられる子」「進んで考え、学びの楽しさを味わう子」「強い心と元気な体で、積極的に挑戦する子」は、教師自身が日々の実践を通じて体現し、子どもたちに伝えていくべき姿勢です。教師の学びの姿勢が、子どもたちの成長に大きな影響を与えるため、教師の学びを重視しています。

3) 教師の自律的な学びが子どもたちに還元される

教師が自身の「得意」や「興味」を生かして、自分だけのルートを使って学びを深め

ていくことは、教育目標の達成に向けた大きな鍵となります。これは、単に指示された方法に従うのではなく、教師が自らの問題意識に基づき、自分の方法で仮説を立て、試行錯誤を繰り返すことを意味します。各教師が自分のルートを使って探究し、その結果を実践に活かすことで、個々の力量が向上し、それが子どもたちの学びに直接的に還元されます。例えば、一人の教師が「子どもたちが積極的に発言できる環境を作る方法」を自分の問いとして追求し、実践を繰り返す中で得た知見を学校全体に共有することで、他の教師の学びも促進され、全校での実践が豊かになります。自分だけのルートで探究を進めることは、教師の個々の成長を加速させ、その成果をクラスや学校全体に反映させることにつながるのです。このプロセスを通じて、教師も子どもたちも共に成長し、より良い学びの場が広がっていきます。

4) 研究による期待される成果

本研究を通じて期待される成果は、教師が自分の興味や関心に基づき、主体的に学び続ける姿勢を持ち続けることができる教育環境の創出です。教師が試行錯誤しながら学びを深めることは、そのまま教育実践に反映され、子どもたちに対する指導の質が向上します。また、教師が自分の「得意」や「興味」を生かして学びを進めることで、教育内容がより多様で柔軟なものとなり、子どもたちが自ら学び、成長する力を高めることができます。さらに、個々の教師が主体的に学び続けることで、学校全体で学び合う文化が根付き、教師間での協力や支援の輪が広がります。これにより、教師の知見や実践が共有され、全体としての教育力が向上することが期待されます。教師の自己成長は、子どもたちに対してより良い教育を提供することに直結し、学校全体の教育の質の向上に寄与します。また、教師が自分自身の学びを深める中で、教育現場の課題に対してより柔軟で創造的な解決策を見つけ出すことができ、具体的な実践方法を学校全体で共有できるようになります。これにより、教師一人ひとりが抱える悩みや課題に対しても、より効果的に対応できるようになり、より良い教育環境の構築が進むでしょう。最後に、教師が自己の学びを通じて自信を深め、子どもたちに対しても前向きな影響を与えることができるようになります。このような学びの循環が学校全体に広がり、教育の質が向上することで、子どもたちは自ら学び続け、挑戦する力を育むことができるようになると思います。

3. 研究の進め方 本研究は3年計画で行う。

1年目：仮説同志で集まり、グループで共同研究するアプローチ

1) 仮説設定（個々の仮説作成）

目的：各教師が自分の教育目標や目指す子ども像に関連した仮説を設定します。個別の仮説は、教師それぞれの授業や活動に基づき、改善したいポイントを明確にするために重要です。

進め方：各教師は自分の授業や活動を通じて、「どのように子どもたちにアプローチすれば教育目標や目指す子ども像に近づけるか」という視点で仮説を立てます。仮説設定の段階では、自分が解決したい具体的な課題や実践したい活動に焦点を当てます。

2) 仮説同志のグループ分けと共有

目的：立てた仮説に基づいて、共通点や方向性が近い仮説同志が集まり、グループを作成します。この段階で、グループごとに研究テーマや仮説を深掘りしていきます。

進め方：各教師が立てた仮説をグループ内で発表し、似たような仮説を持つ教師が集まるようにグループ分けを行います。グループ内では、各自の仮説の進行状況や実践アイデアをシェアし、それぞれの仮説に基づく実践方法や研究テーマを絞り込みます。グループ内で協力して実践内容を計画し、役割分担を決めて実施に向けて準備を行います。

3) 実践と協力

目的：グループ内で共通の仮説に基づいて実践を進め、得られた成果や気づき、課題をグループで共有し、互いにサポートします。

進め方：各教師は自分の仮説に基づいた授業や活動を実施し、その過程で得られた成果や課題をグループで定期的に共有します。グループ内でフィードバックを行い、お互いの実践を改善するためのアイデアやアドバイスを出し合います。仮説に基づいた実践内容が進行していく中で、グループのメンバーはサポートし合いながら、仮説を検証していきます。

4) 成果の共有と振り返り

目的：1年目の実践結果をグループで振り返り、得られた成果や改善点を共有し、次年度に向けた方向性を決定します。

進め方：グループ内で、各教師が実践の成果を発表し、その実践が仮説に対してどのように貢献したかを評価します。振り返りを通じて、グループ内で今後の方向性や改善点を議論し、次年度に向けて仮説を修正する必要があるか、または新たな仮説を追加するかを決めます。

5) 1年目の研究の期待される成果と効果

期待される成果：

- ・仮説同志で集まり、共通の研究テーマを深掘りすることで、各教師が自分の実践に新たな視点を取り入れることができ、より効果的な実践が可能になります。
- ・グループ内での意見交換やフィードバックを通じて、教師同士が自分の仮説を見直し、より実践的かつ効果的な方法に進化させることができます。
- ・仮説に基づく具体的な実践を通じて、教師が教育目標や目指す子ども像に向かって一歩ずつ進んでいくことができます。
- ・教師が、自分の得意分野や興味分野で試行錯誤を繰り返して行う研究なので、子ども達は質の良い授業や取組を享受することができます。

期待される効果：

- ・グループ研究を通じて、教師同士が協力し合い、共通のテーマに対して集中的に取り組むことで、より実践的な知識や経験を共有できます。
- ・実践の進行状況をグループ内で共有することで、教師一人一人の教育力が向上し、結果的に子どもたちの成長を促進できます。
- ・仮説をグループで深掘りし、実践結果を共有し合うことで、次年度の研究がより充実したものになり、次のステップに進むための土台を作ることができます。

2年目：仮説の検証と個別活動

目標：いくつかの仮説を教科や活動に結びつけて、実践的に検証を行うこと。

内容：1年目に設定した仮説から、いくつか有効な仮説を選び出します。その仮説をそれぞれ教師一人一人が自身の得意教科や興味ある教科、あるいは日常の指導活動において検証を行います。仮説の検証においては、子どもたちの学びや成長を観察し、どのようなアプローチが効果的かを実践的に探求します。1年目に設定した仮説から、いくつか有効な仮説を選び出します。その仮説をそれぞれ教師一人ひとりが自身の得意教科や興味のある教科、あるいは日常の指導活動において検証を行います。仮説の検証においては、子どもたちの学びや成長を観察し、どのようなアプローチが効果的かを実践的に探求します。それぞれの教師は、検証の過程で得た知見や成果を定期的にシェア会で報告し、他の教師と意見交換を行います。これにより、教師同士が自分のアプローチに対する多角的なフィードバックを受け、実践を改善していきます。仮説検証の中で新たな疑問点や改善点が出てきた場合、それに対する再アプローチも行い、実践をより深めていきます。

3 年目：仮説の共通検証と全体への適用

目標：1 年目と 2 年目に得た知見をもとに、共通した教科や活動において、1 つまたは 2 つの仮説をさらに検証し、全体での効果を評価すること。

内容：2 年目までの実践とフィードバックを基に、最も効果的だった仮説を選定します。選定された仮説は、教師全体で共通の教科や活動で実践し、全員でその結果を評価します。仮説が学校全体にどのように適用できるかを考え、共通の指導法やアプローチを洗い出します。また、仮説が実践的に学校全体でどのような影響を与えるか、子どもたちの学びにどのように寄与したかを評価します。最終的な結果をもとに、研究成果をまとめ、シェア会や校内研修を通じて全教師で成果を共有し、学校全体での指導方法に活かしていきます。